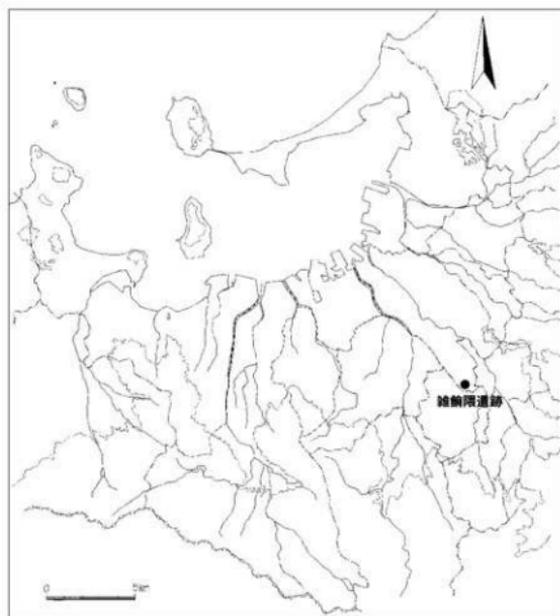


雑餉隈遺跡 7

— 雑餉隈遺跡第16次調査報告 —

2011

福岡市教育委員会



遺跡略号 ZSK-16
調査番号 0445

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する雑餉隈遺跡第16次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成23年 3月18日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成16年度に博多区昭南町2丁目13において実施した雑餉隈遺跡第16次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、楠瀬慶太が行った。
4. 製図は長家が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6° 西偏し、真北から6° 18' 西偏する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（SC）、土坑（SK）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0445	遺跡略号	ZSK-16		
所在地	博多区昭南町2丁目13		分布地図番号	13-0054	
開発面積	216.86㎡	調査対象面積	103.88㎡	調査面積	92㎡
調査期間	平成16年8月3日～平成16年8月6日		事前審査番号	16-2-329	

本文目次

I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査体制	1
II 調査の記録	1
1 遺跡の立地とこれまでの調査	1
2 調査概要	6
3 遺構と遺物	7
1) 竪穴住居跡	7
2) 土坑	13
3) ビット	13
4) 小結	14

挿図目次

第1図 調査区位置図1 (1/50000)	3
第2図 調査区位置図2 (1/4000)	4
第3図 調査区位置図3 (1/500)	5
第4図 遺構配置図 (1/200)	5
第5図 調査区全体図 (1/80)	6
第6図 SC01・02実測図 (1/40)	8
第7図 SC02出土遺物実測図 (1/3)	9
第8図 SC03A・B実測図 (1/30、1/40)	10
第9図 SC03出土遺物実測図 (1/3)	11
第10図 SK04・06及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	13

表目次

表1 雑餉隈遺跡調査一覧	2
--------------	---

写真目次

写真1 調査区西半全景 (東から)	14
写真2 調査区東半全景 (南東から)	14
写真3 調査区南東端全景 (北から)	14
写真4 SC01・02 (東から)	15
写真5 SC02竈検出状況 (東から)	15
写真6 SC02竈土層	15
写真7 SC03A・B (東から)	16
写真8 SC03B竈検出状況 (南西から)	16
写真9 SC03B竈 (南西から)	16

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成16年6月25日付で、福岡市教育委員会宛に福岡市博多区昭南町2丁目13の物件に関して、個人専用住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号16- 2- 329）。申請を受けた埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である雑餉隈遺跡（分布地図番号13-0054・遺跡略号ZSK）の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、平成16年7月26日に試掘調査を行い、地表下50cmほどの鳥栖 ROOM 上面においてピットを検出した。埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、基礎杭工事に伴い遺構の破壊が避けられないため、申請地216.86㎡のうち、建物施工にかかる103.88㎡について、平成16年度に国庫補助金を適用して発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成16年8月3日～平成16年8月6日、調査番号は0445である。また、調査面積は92㎡、遺物はコンテナ4箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては、関係の皆様から発掘調査についてご理解を頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制（平成16年度）

事業主体	個人
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	埋蔵文化財課長 山口譲治
	調査第2係長 池崎讓二
調査庶務	文化財整備課 御手洗清
調査担当	調査第2係 長家伸
調査作業	澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ 藤野熾志 西川シズ子 宮崎幸子 栗野孝子

II 調査の記録

1 遺跡の立地とこれまでの調査

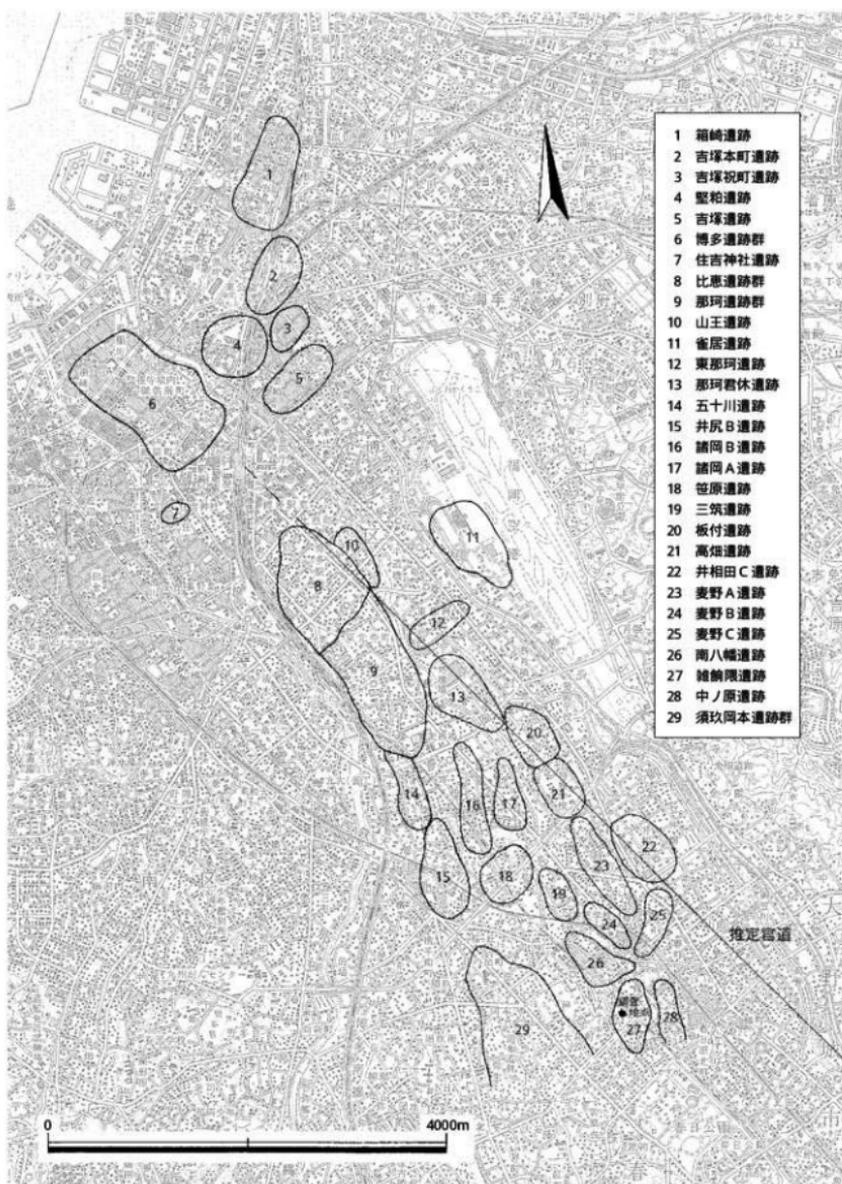
雑餉隈遺跡が位置する福岡平野は、北側を博多湾に面し、東側を三郡山地、南側を背振山地に囲まれており、平野内部には那珂川と御笠川が貫流している。両河川間には複雑に開析され樹状に伸びる洪積丘陵群が海岸砂丘後背まで存在している。雑餉隈遺跡は福岡平野の南側洪積丘陵上に位置しているが、周辺はこれまでの開発によって地形の改変が大きく進み、旧状が不明瞭となっている。しかし、近年の発掘調査及び試掘調査によって、埋没した谷地形により舌状に延びたそれぞれの丘陵が画されていることが明らかとなってきた。これらの丘陵上には雑餉隈、麦野A～C、南八幡、中ノ原遺跡などが立地しており、それぞれの遺構群のあり方には相互に密接な関連が認められる。

ここではこれらの遺跡群の概要を簡単に記しておきたい。最もさかのぼる遺物としては旧石器時代に位置付けられる石刃・剥片等があり、各遺跡において点的に出土している。続く縄文時代の遺構は極めて少ないが、麦野A・C、中ノ原遺跡から落とし穴状の遺構が確認されている。弥生時代には、雑

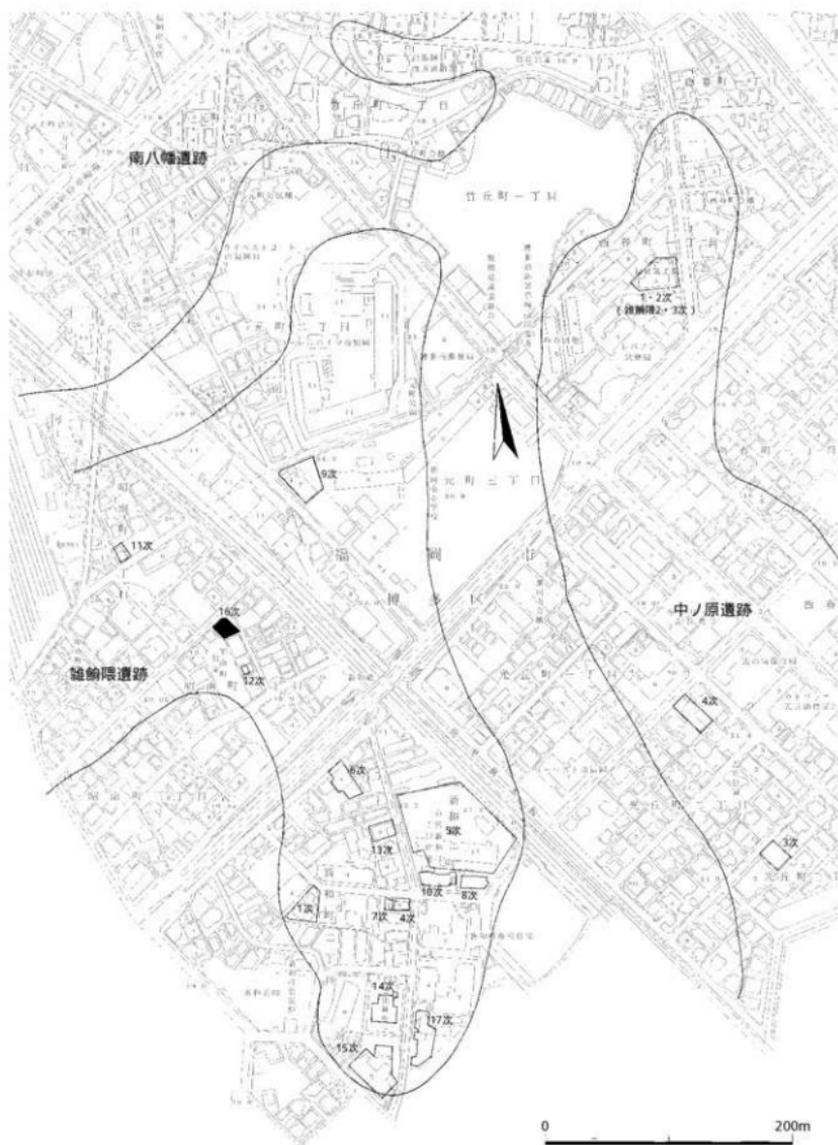
館隈遺跡において早期の木棺墓から磨製石剣・石鏃が出土し、前期から中期の竪穴住居も確認されているが、大規模な集落は認められない。また、後期も遺構のあり方は散漫であるが、南八幡遺跡において、竪穴住居跡から多量のガラス玉や銅冶作業に伴う鉄片が出土しており注目される。古墳時代も引き続き遺構のあり方は散漫で、南八幡遺跡において後期の竪穴住居跡が数棟確認されている程度である。この後、古代に至って遺構のあり方が大きく展開を見せ、遺跡群全体に竪穴住居跡が確認されるようになる。これらは企画性を持って配置され、数回の建て直しも想定できるため、長期間にわたり、計画的な集住が行われたものと考えられる。さらに、館隈遺跡では竪穴住居跡群のほかにも直交して配される2棟の大型竪立柱建物も検出されている。また、麦野A遺跡においても官衙的な施設を囲むと考えられる溝・堀及び門状の遺構を確認している。これらの遺跡群が立地する洪積丘陵の東側に広がる沖積地には大宰府に進む古代官道が確認されており、この官道に隣接する高畑遺跡・井相田遺跡からは墨書土器・木簡等官人層の存在を強く示唆する遺物が多く出土している。この後、中世段階の遺構・遺物は再び激減するが、区画溝・土坑墓も確認されており、今後の調査の進展により、新たな知見が得られる可能性もある。

次数	調査番号	住所	概要	期間	調査面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	報告書 (巻)	備考
1次	9024	新和町2-10-2・6	古代土坑	900718 - 900825	500	262	276	
2次	9324	西春町1-17-27	古代竪穴住居・土坑	930719 - 930806	559	345	409	中ノ原遺跡1次に変更
3次	9349	西春町1-18	古代竪穴住居	931118 - 931204	238	156	409	中ノ原遺跡2次に変更
4次	9367	新和町2-13	古代竪立柱建物・土坑	940309 - 940324	140	105	409	
5次	9407	新和町1-2・6	旧石器時代遺物 弥生時代竪穴住居・土坑 古代竪穴住居・竪立柱建物・土坑・井戸・溝	940411 - 941018	6400 (総面積)	4784	569	5・8・10次は一連の調査
6次	9431	新和町2-1-35	古代竪穴住居・竪立柱建物・土坑	940808 - 940905	688.8	481	528	
7次	9523	新和町2-14-1	古代土坑・溝	950828 - 950901	82.64	54	569	
8次	9550	新和町1-7の一部	5次に同じ	960202 - 960327	6400 (総面積)	3945	569	5・8・10次は一連の調査
9次	9648	元町3-1	古代竪穴住居・大型竪立柱建物・土坑	961023 - 961129	823.77	733	570	
10次	9670	新和町1-7の一部	5次に同じ	970214 - 970331	6400 (総面積)	337	569	5・8・10次は一連の調査
11次	9916	昭南町1-36	古代竪穴住居 中世土坑墓	990524 - 990603	11451	60	867	
12次	0223	昭南町2-19	古代竪穴住居・土坑	020618 - 020628	110	29	793	
13次	0234	新和町2-7-11	旧石器時代遺物 古代竪立柱建物	020926 - 021011	291.78	156	867	
14次	0243	新和町2-24-1	旧石器時代遺物 古代竪穴住居・土坑	021101 - 030117	1358.97	645	868	民間調査
15次	0349	新和町2-25	弥生時代木棺墓 古代竪穴住居	031101 - 040331	1932	650	868	民間調査
16次	0445	昭南町2-13	古代竪穴住居	040803 - 040806	216.86	92	1115 (本書)	
17次	0460	新和町1-102-1	旧石器時代遺物 古代竪穴住居・土坑・溝	041101 - 041130	1234.64	487.44	877	

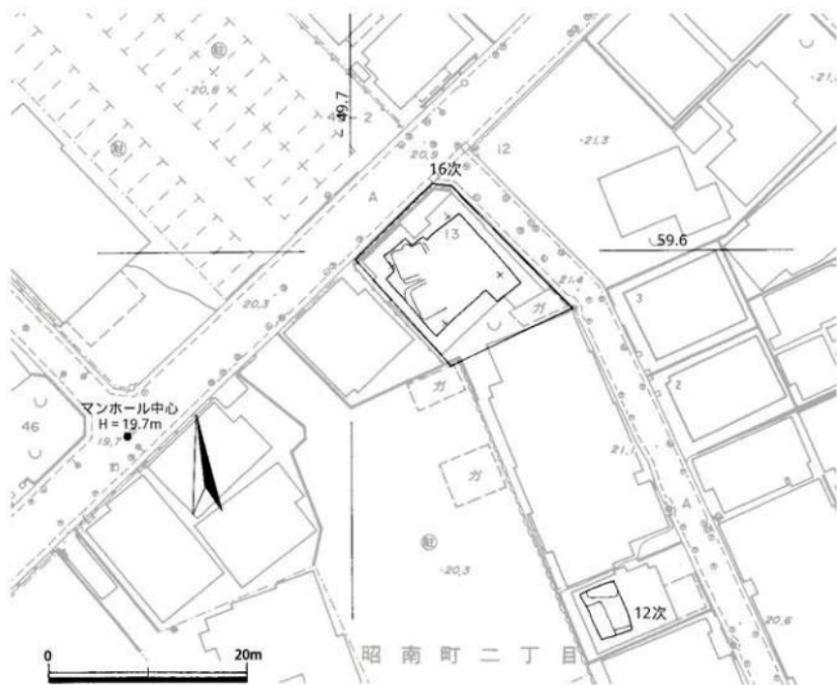
表1 館隈遺跡調査一覧



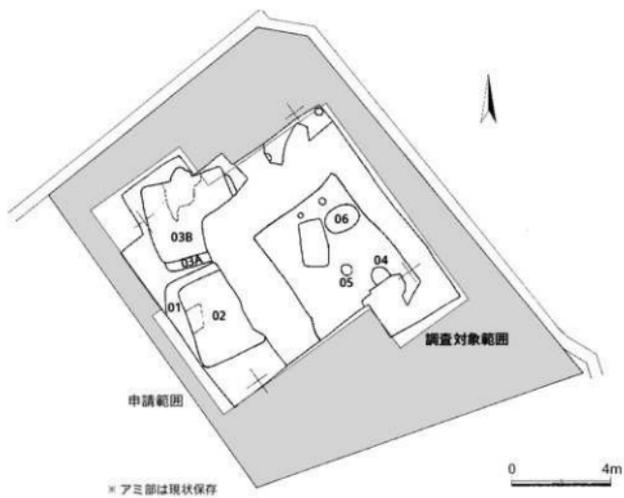
第1図 調査区位置図1(1/50000)



第 2 図 調査区位置図2 (1 / 4000)

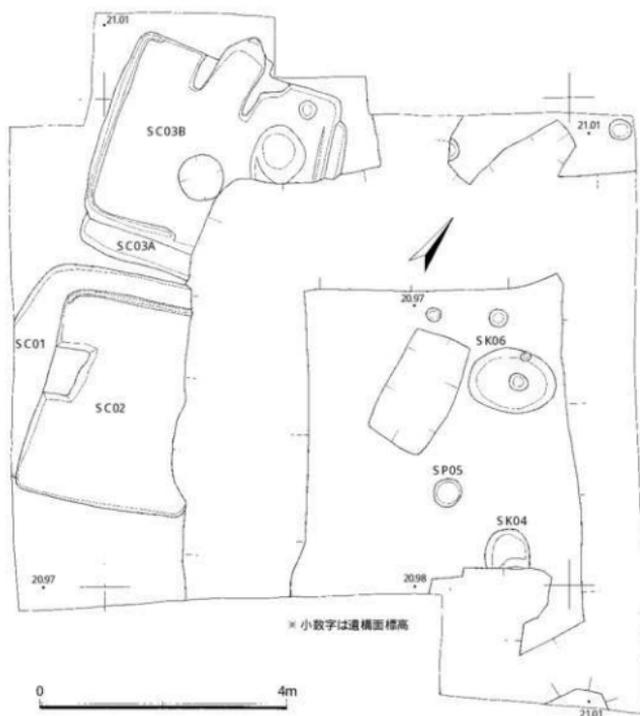


第3図 調査区位置図3(1/500)



※アミ部は現状保存

第4図 遺構配置図(1/200)



第5図 調査区全体図(1/80)

2 調査概要

今回の調査で対象となったのは、申請面積216.86㎡のうち、建物建設にかかる103.88㎡である。調査は既存の建物解体後に行い、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。なお、廃土を場内処理する必要から、対象地を2回に分け、土砂を反転して調査を行っている。

遺構面は現地表下30～50cm前後の鳥栖ローム層上面であるが、これまでの削平・攪乱が著しく、旧状を大きく失っていた。現状で遺構面は標高21m前後を測り、調査区内でほぼ平坦となっているが、現況の道路勾配などから考えると、本来は南～西に向かって緩やかに傾斜していたものと考えられる。なお、今回の調査に使用した標高は、1/500道路台帳記載の道路中央標高を基準とし、記載地点に存在した汚水マンホール中央を標高19.7mとして、調査区内に標高を移動したものである。

検出遺構は奈良時代の竪穴住居跡及び土坑・ピットである。竪穴住居跡は調査区西側で検出した。東側を後世の攪乱により破壊されているが、2棟が並列し、それぞれが切り合いを有しており、あわせ

て4種の竪穴住居跡が確認できた。また、ビット・土坑は検出面からの深さは20cmほどで、遺存状況は不良である。出土遺物は古代に位置付けられる土師器・須恵器であり、これ以外の遺物はほとんど出土していない。

雑餉隈遺跡及び周辺の麦野A～C遺跡、南八幡遺跡、中ノ原遺跡等では竪穴住居跡を主体とした濃密な奈良時代の集落遺構群が検出されており、今回の調査結果もこれまでの調査事例に倣うものである。また、雑餉隈遺跡ではこれまで南側の調査が比較的多く行われてきているが、本調査地点の西側に位置する第11次調査でも確認されたように、遺跡西側にも同様の遺構群が広がることが確認できた。

3 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

本調査区では西側で主軸方位をほぼそろえる竪穴住居跡を計4棟検出しているが、位置関係も近接しており、同時並存したものがあるかなど、各住居跡同士の時間的な関係は明確にし得ていない。

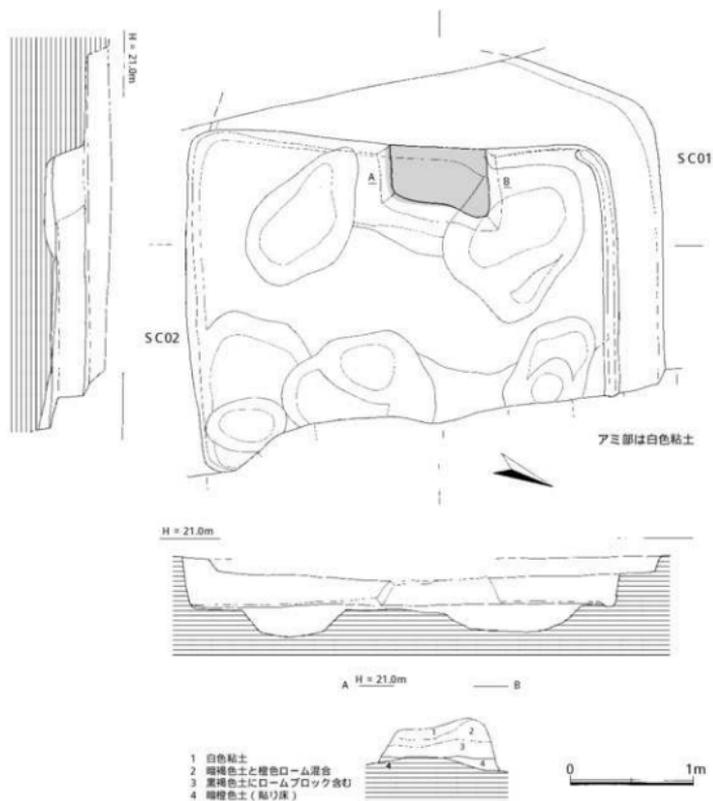
SC01(第6図)

調査区西側で検出した。切り合いと削平等により全体の形状は明らかでないが、南北長3.6mを測り平面はやや歪な方形を呈するものと考えられる。埋土は白色粘土ブロックを含む黒褐色土である。SC02と埋土の識別が困難で、掘り下げ当初は先後関係が不明であったが、検出面でのSC02層白色粘土の広がりなどから、SC01→02の関係と考えられる。検出面からの壁高は20cmほどで、床面にはビット、焼土等は見られない。出土遺物は土師器小破片が2点のみで詳細な時期は不明であるが、うち1点は外面が2次的な被熱のため暗赤褐色化している。切り合いの状況や調査区内での遺物出土状況、周辺の遺構分布状況などから、8世紀代の竪穴住居跡と考えて大過ないであろう。

SC02(第6図)

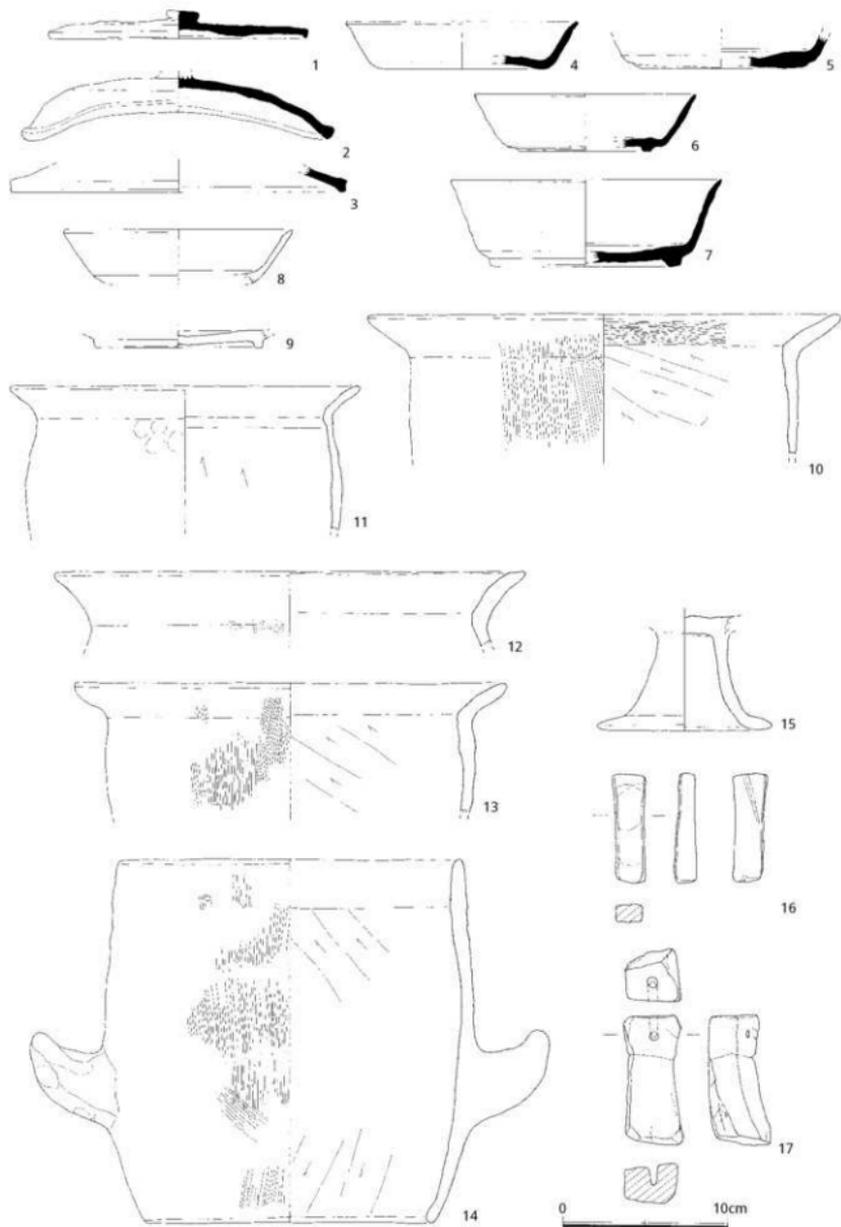
調査区西側で検出し、SC01に後出するものと考えられる。主軸方位はN-23°-Wである。東側を攪乱によって失っているが、南北長3.5m、東西長約2.8mを測り、平面隅丸長方形を呈する。埋土は黒褐色土で白色粘土ブロックを含んでいる。検出面からの壁高は40cmほどで、床面はほぼ全体に暗橙色土による貼り床を施している。床面北壁沿いに幅10～15cm、深さ2cm程度の壁溝を確認するが、その他主柱穴等は認められない。西壁中央には竈が構築されており、白色粘土が広がっている。竈の残存状況は不良であり、袖部や明確な燃焼部(被熱痕跡)は確認できなかった。また、床面全体に行われた貼り床を除去すると、中央が高く、四隅が土坑状に掘り窪められており、床面から30cm前後の深さを測る。遺物は須恵器蓋・坏・硯、土師器硯・甌・椀・高坏、砥石などが出土し、8世紀中頃に位置付けられる。

出土遺物(第7図) 1～7は須恵器である。1は天井部にボタン状のつまみを有し、外面には回転ヘラ削りを行う。また、口縁端部は三角形に折り曲げ、内面には部分的に指ナデの痕跡が残る。2はつまみを欠失している。天井外面の1/2ほどは回転ヘラ削りを行う。口縁端部は四角く整形し、外面をわずかに跳ね上げる。不整形を呈するのは、焼きひずみではなく、焼成前に両側から人為的に曲げたものと考えられ、上面からの形状は龜の甲羅状となっている。3は断面を三角形に折り曲げた口縁端部破片である。4・5は坏で、共に外底面はヘラ切りの後粗くナデを行うのみである。6・7は高台付きの坏である。共に、低平な高台が外底屈曲部近くに貼り付けられる。6は外底面ヘラ切り、7は外底面に回転ヘラ削りを行っている。8～15は土師器である。8は坏の体部破片、9は高台付きの坏底部である。10～13は甕である。いずれも口縁部から胴部上半の破片である。10は甕からの出土である。胴部から口縁部外面全体に煤が付着しているが、上部の1/3程度が残存するのみで、大半の破片は失わ

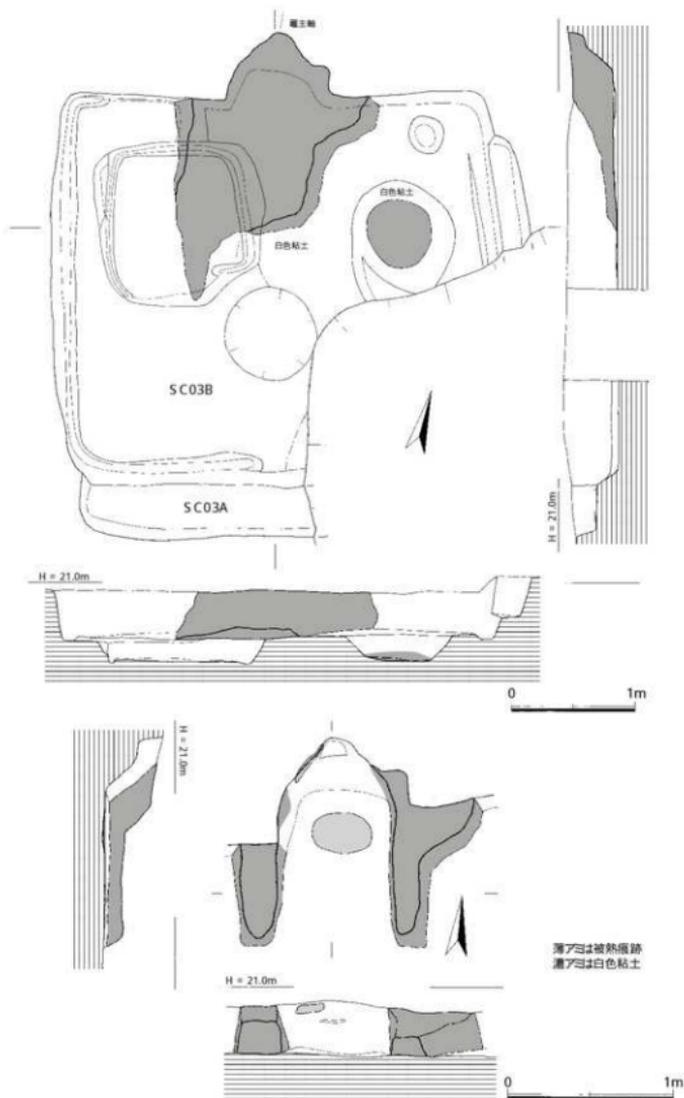


第6図 SC01・02実測図(1/40)

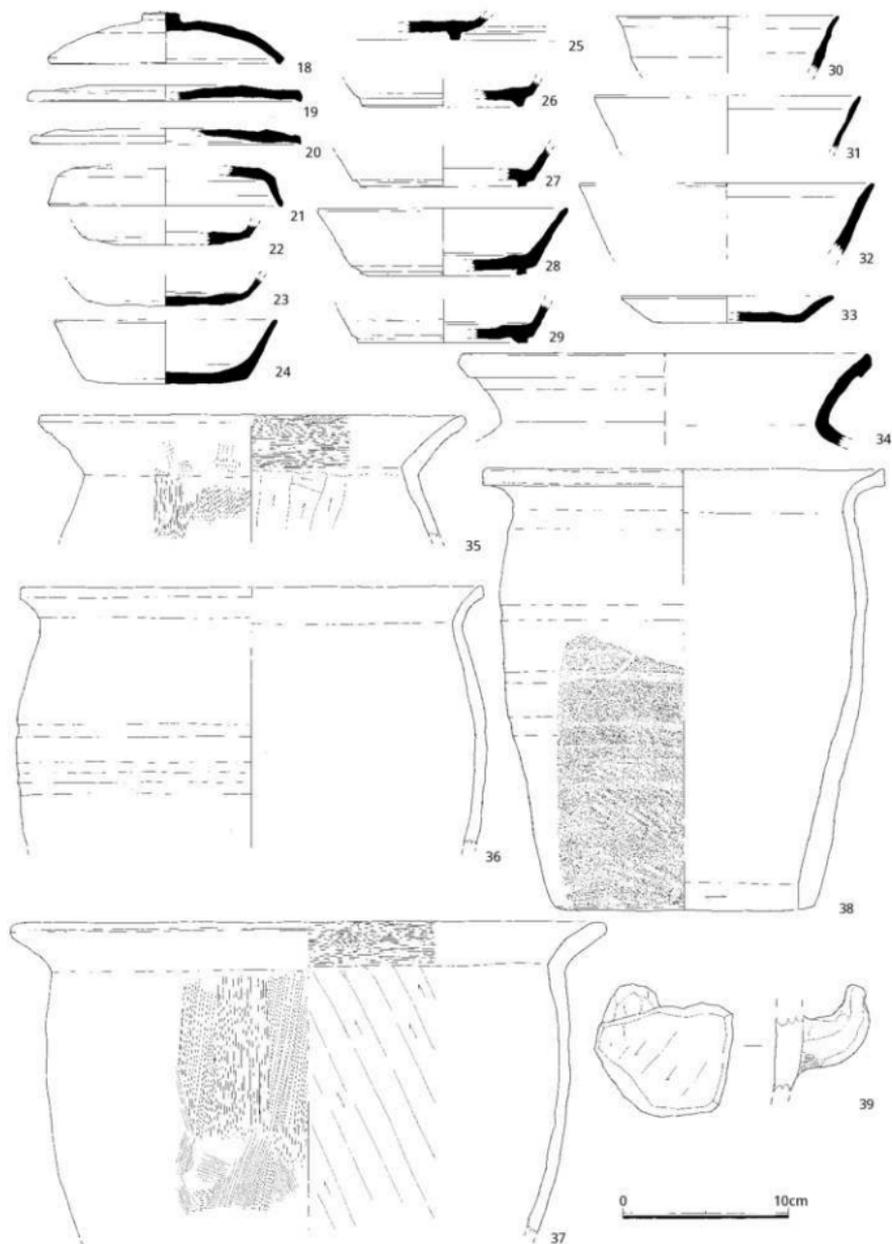
れている。外面は口縁部～屈曲部、また屈曲部～胴部に分割した縦方向の刷毛目が行われる。内面は口縁部に横刷毛を行い、胴部は斜め方向に削り上げている。胴部と口縁部の屈曲部は明瞭で、口縁部は直線的に外側に開く。胎土には1～3mmの石英砂粒を多く含み、橙色を呈する。11は摩滅が進んでおり、調整不明瞭であるが、胴部内面はヘラ削りが行われる。また、外面は2次的な焼成を受けており、部分的に赤変している。12は外面屈曲部に縦刷毛が痕跡的に残る。13は外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行う。14は両側に把手を有する甌である。断面砲弾形を呈し、底部は高抜けとなる。調整は外面縦刷毛を行い、内面は口縁部から3cmほどはナデ、それ以下は全体に斜め方向のヘラ削りを行う。胎土には1～3mm程度の石英砂粒を多く含んでいる。15は高坏脚部である。胎土は精良でわずかに石英砂粒を含み、橙色を呈す。摩滅が進んでいるため調整は不明瞭である。16・17は手持ちの砥石である。16は砂岩製、17は白色シルト岩製である。17には紐掛け用と考えられる孔が穿たれている。



第7图 SC02出土遺物実測図(1/3)



第8圖 SC03A・B実測図(1/30、1/40)



第9図 SC03出土遺物実測図(1/3)

SC03A・B(第8図)

SC01・02の北側で検出する。埋土は黒色土で、攪乱部分の断面観察から2棟の切り合いが認められたが、前後関係は明らかでなく、出土遺物の分別もなしであった。主軸方位は両棟ともにN-16°-Wである。ここでは、床面の高い窪穴住居跡をSC03A、竈を有し床面の低い住居跡をSC03Bとする。SC03Aは南側と東側の壁の一部が残るのみである。平面規模は南北長3.2m、東西長3.6mに復元できる。検出面から床面までの深さは20~30cmほどで、現状ではこれに付随する竈・支柱等の施設は認められない。SC03Bは南北長3.2m、東西長3.6mを測り、北壁中央部分に煙出しを屋外に伸ばす竈を有している。竈構造材としての白色粘土は屋外より屋内床面に伸びており、住居埋土除去後では北壁中央部分から、床面中央部に向かって広がっていた。この後、黒色土との混合した部分を除去し、白色粘土による竈袖部分を検出すると、竈内の燃焼部床面には被熱赤変痕跡が残っていた。竈袖長は壁より60cmを測り、煙出しは燃焼部より階段状となり屋外に伸びている。また、煙出しの壁面にも被熱痕跡が認められる。なお、竈内部に原位置を保つ遺物は認められない。床面には支柱は認められないが、東西両側を中心として、深さ3~5cmほどの壁溝が残る。また、東側には径80cm、深さ20cmほどの断面浅皿状を呈する掘りこみを有する。埋土は黒褐色土で、底面に白色粘土が広がっている。また床面西側半分には橙色土と黒色土の混合土による薄い貼り床が行われており、竈西袖下には一辺1.4m、深さ20cmの方形土坑が認められるが、機能・用途については明らかでない。遺物はA・Bで分別できていないが、須臾器蓋・坏・皿・甕、土師器坏・甕・甔・碗・高坏などがあり、8世紀中頃~後半に位置付けられる遺物が出土している。

出土物(第9図) 18~34は須臾器である。18~21は蓋である。18はほぼ完形で口径14.4cmを測る。天井には低平な円盤状のつまみを有し、外面はヘラ切りの後調整を行っていない。口縁端部は三角形を呈するが、端部の整形は鈍い。19・20はいずれも口縁端部は鈍く下垂し、天井部外面はヘラ切りののち調整は行われていない。胎土には1mm以下の微砂粒を多く含んでいる。21は蓋蓋で、胎土は精良である。口縁端部は外反気味に丸く納めている。また、天井部外面はヘラ切りののち粗いナデが認められる。22~24は坏である。いずれも外底面はヘラ切りによる。25~28は高台付き坏である。25・27は外底面-屈曲部にかけて回転ヘラ削りを行い、26・28は外底面ヘラ切りによる。29は底部-体部外面まで回転ヘラ削りを行っている。壺底部破片であろうか。30~32は口縁部破片で、端部は外反気味に納める。33は皿である。外底面は回転ヘラ削りを行う。34は焼成不良の甕である。口縁部は玉縁状を呈する。35~39は土師器で、35~37は甕である。35は端部を丸く納めるが、部分的に肥厚して玉縁状となる。調整は口縁部外面縦刷毛ののち粗い横ナデ、胴部は口縁部より細かな縦刷毛が残る。また内面は、口縁部に横刷毛を行い、胴部には縦方向を主体としたヘラ削りの後、横方向にヘラ削りを施している。36~38は竈出土であるが、部分的な破片にとどまる。36は口縁端部には面取りを行い、胴部内外面横ナデによる。外面には幅5mmほどの沈線状の窪みが残る。胴部はやや中膨らみとなる。38と製作上の特徴が類似しており、同一個体の可能性が高い。37も長胴の中膨らみとなる。外面縦刷毛ののち口縁部上半には横ナデを行う。また、胴部下半には横刷毛も残る。内面は、口縁部が横刷毛、胴部は縦方向のヘラ削りを行う。また、口縁端部は面取りを行い、端面には沈線が残る。38は甕である。胴部は筒状となり、内面は横ナデの後下端部のみヘラ削りを行う。また、外面は上半部が横ナデ、下半部には敲きの後横ナデを行い、その上から粗いヘラ削りを施している。39は把手である。外面に縦刷毛が残る。

2) 土坑

SK04 (第10図)

調査区東側で検出する。攪乱によって南側を失うが、現状では北側に平坦面を有し二段に掘り窪められている。埋土は炭化物・焼土を含んだ黒色土であり、粘土は含まれていない。SK06と共に削平された竪穴住居跡の一部とも考えられるが判然としない。須恵器杯・蓋、土師器甕の破片が出土している。8世紀中頃～後半に位置付けられる。

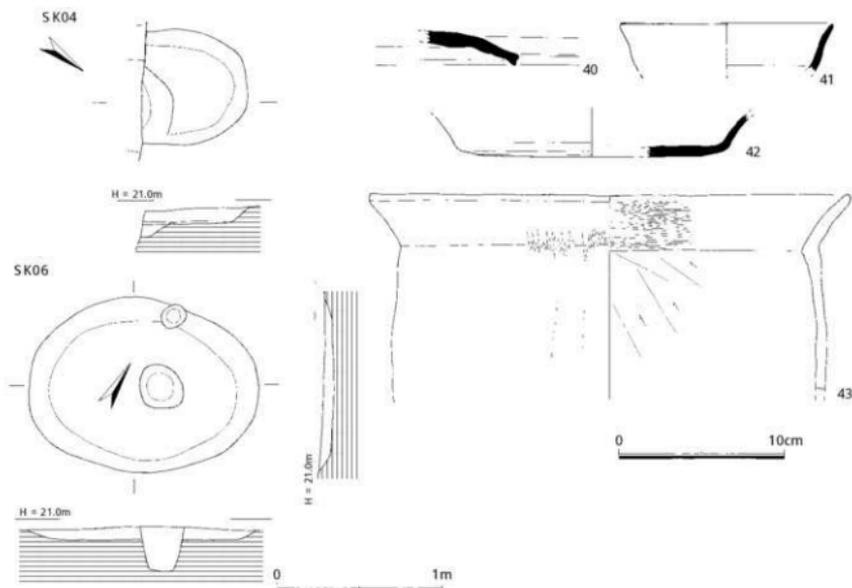
出土遺物 (第10図) 40～42は須恵器である。40は天井部回転ヘラ削りを行う蓋である。41は杯の口縁部破片である。42は皿である。外底面はヘラ切りの後わずかにナデを行っている。43は土師器甕である。内面は口縁部横刷毛、胴部縦方向のヘラ削りを行い、外面は縦刷毛ののちナデを行う。

SK06 (第10図)

調査区東側で検出する。SK04の2m北に位置し、上面を黒色土埋土のビットに切られている。1.4×1.05mの平面長円形を呈し、検出面からの深さは5～8cmと非常に浅い。埋土は暗褐色を呈し、形状・埋土共にSC02の貼り床に似る。遺物は出土していない。

3) ビット

SK04・06周辺で数基のビットを検出したが、検出面からの深さは10～25cm程度である。埋土はいずれも黒色土で、遺物はSP05から土師器の小破片が1点出土するのみである。



第10図 SK04・06及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

4) 小結

今回の調査では攪乱・削平が進む中で、4基の竪穴住居跡と土坑・ピットを検出した。いずれも古代に位置付けられるもので、これまでの周辺の調査成果に倣うものであった。洪積丘陵上に立地する麦野A～C、南八幡、雑餉隈、中ノ原遺跡においては、これまでに200棟を超える竪穴住居跡を確認している。時期的には8世紀代にほぼ限られており、竪穴住居跡の計画的な配置や規格性の高さから意図的な集住が行われたことが想定できる。また、麦野A遺跡7次、雑餉隈遺跡9次調査に見られるような一般集落に伴う建物とは異なる建物が配されていることから、公的な権力によって開発された人工的な集落の可能性を考えることが出来よう。これらの遺跡群からこの直前・直後の遺物がほとんど出土していないことも、自然発生的な集落でないことを裏付けるものと考えられる。出土建物についても一般集落と異なり、農工具等が見られず生活感のないことが指摘されている。また、建物配置については特に大規模な調査が行なわれた雑餉隈5・8・10次調査において、いくつかの主軸方位にまとまっていることがわかる。ここでは大型の竪穴住居及び掘立柱建物はN-10°-14°-Wにとり、このほかN-0°-W、N-45°-E等の主軸方位が認められ、それぞれが群をなすように配置されている。なお、9次調査の大型建物もN-14°-Wの主軸方位である。建物配置には地形的な制約も受けると考えられるが、この調査区にとどまらず広範囲で確認される竪穴住居群が同様の主軸を指向しており、今後、景観復元等を行う上で注意が必要であろう。



写真1 調査区西半全景（東から）



写真2 調査区東半全景（南東から）



写真3 調査区南東端全景（北から）



写真4 SC01・02(東から)



写真5 SC02竈検出状況(東から)



写真6 SC02竈土層



写真7 SC03A・B(東から)



写真8 SC03B電検出状況(南西から)



写真9 SC03B電(南西から)

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくまいせき 7						
書名	雑餉隈遺跡 7						
副書名	雑餉隈遺跡第16次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1115集						
編著者名	長家 伸						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	20110318						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
ざっしょのくまいせき 雑餉隈遺跡	ふなかけんふくおかしほかくて 福岡県福岡市博多区 しらぬえまち 稲南町2丁目13	40132 0054	33° 32' 23" (世界測地系)	130° 27' 46" (世界測地系)	20040803 - 20040806	92	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
雑餉隈遺跡	集落	古代	竪穴住居跡・土坑・ ピット		土師器・須恵器	奈良時代の竪穴住居跡を複数検 出	
要 約	今回の調査では奈良時代の竪穴住居跡を4棟検出した。同じ洪積丘陵上に位置する周辺遺跡の調査においても、妻野A-C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡など広範囲で同時期の竪穴住居跡があわせて200棟以上確認されている。また、妻野A遺跡7次調査、雑餉隈遺跡9次調査では官衛的な建物も検出しており、公的な権力による計画的な集住が行われていたことが想定できる。集住の目的については明らかではないが、丘陵の東側には古代官道も確認されており、令制下の集落構造・景観復元などを進める上で重要な遺跡である。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1115集

雑餉隈遺跡 7

- 雑餉隈遺跡第16次調査報告 -

平成23年3月18日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 石橋印刷株式会社

福岡市博多区東比恵3丁目21番10号